

詩篇84篇 「慕わしい主の大庭」

1A 主にある住処 1-4

2A シオンへの大路 5-7

3A 神の盾 8-12

本文

今朝は、詩篇 84 篇全体を見ていきたいと思います。いつもと異なり、午後礼拝はその続きで 85 篇から読んでいきたいと思います。

この詩篇は、巡礼する人の賛歌です。遠くからエルサレムにある神殿に向かって旅をします。ユダヤ人は、成年男子は三つの祭り、過越の祭り、五旬節、そして仮庵の祭りに集まることが主から命じられていました。ですから、離散したユダヤ人であっても、世界からエルサレムに向かって主のところに来るのを楽しみにしながら向かっていくのです。その時に、主の大庭に行きたいというその強い慕い求めが、この詩篇の内容になっています。

私が思い出すのは、宣教地における教会生活でした。そこでは、交通機関がそれほど発達していないところでした。夕方六時ぐらいには、バスの運行がなくなります。タクシーに乗れば費用がかかります。それで教会の所有する小型のバスを運行するのです。私はそのバスが来るのが楽しみでした。そこには、愛する兄弟姉妹が乗っています。そして教会に向かって走るのです。そこで、の交わりも楽しかったし、それから礼拝に臨んで神を賛美し、御言葉を聞けることが楽しみでした。皆さんは、礼拝に集う時にいかがでしょうか？おそらく、このような楽しみと喜びが、ここで表現されているのだと思います。

1A 主にある住処 1-4

私が牧者として、皆さんにこの教会がぜひこうなってほしいと強く願っていることが、この詩篇でしっかりと書いてあります。「自分の居場所になってほしい」ということです。1 節から 4 節までです。

84 指揮者のために。ギテトの調べに合わせて。コラの子たちの賛歌 84:1 万軍の主。あなたのお住まいはなんと、慕わしいことでしょう。84:2 私のたましいは、主の大庭を恋い慕って絶え入るばかりです。私の心も、身も、生ける神に喜びの歌を歌います。84:3 雀さえも、住みかを見つけました。つばめも、ひなを入れる巣、あなたの祭壇を見つけました。万軍の主。私の王、私の神よ。84:4 なんと幸いなことでしょう。あなたの家に住む人たちは。彼らは、いつも、あなたをほめたたえています。セラ

主の住まいをコラは、慕っています。恋い慕って絶え入るばかりだ、とあります。凄いですね、こ

それは完全に恋愛の言葉です。相手に対して恋い慕って、自分が絶え入るばかりになっています。けれども、当時のユダヤ人は形式に陥りがちでした。エルサレムにはいつも神殿があり、それで確かにいけにえを捧げにここにやって来ていましたが、「いつもしなければいけないこと」という義務感があったものの、楽しさや喜びが半減していました。それで、周囲にある異邦人の神々に興味が湧いて、それに仕えるようになってしまったのです。そればかりか、その神々を宮の中に持ち込みました。しかし、バビロンに捕え移されました。それで詩篇は、数多くシオンから離れていることの悲しみと嘆きを描いています。そしてエルサレムに帰還して、長いこと失ったものを取り戻すことができ、主の大庭の尊さを味わったのです。

放蕩息子にある神の恵みに通じるかもしれません。弟息子は父のところから離れましたが、それによって父から離れて暮らすことがいかに惨めなものかを痛いほど知り、それで自分の家に戻りました。そして父は息子として彼を受け入れ、そして祝福します。その喜びがあるのです。しかし兄息子はいつもいるのに、不満を抱きました。父の言った言葉が大事ですね、「おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。(ルカ 15:31)」いつもいるということの喜びを失ってはいけません。私の場合は、妻がいっしょにいることを喜びとしていなければいけません。そして、皆さんといっしょにいることを私は何よりも楽しみにしています。

そして、「居場所」は「ほっとできる場」であることが大事です。雀も住みかを見つけ、そしてツバメも巣を見つけて、なんと「あなたの祭壇」という言葉をコラは用いています。その巣が神に拠って備えられたことを意味しています。それと同じように、私たちが教会にいてほっとできているかどうか問われています。たとえ立派な家があっても、そこがほっとできる場になっていなければ、まるで家を持っていないホームレスと同じようになってしまいます。教会が「行く場所」ではなく、「戻ってくる場所」になっているかどうか、とても大切です。

戻ってくると感じる時は、良い意味で外に出れば居心地が悪いということになります。そこは自分が属しているところではない、というぎこちなさがあります。聖書に、「地上の寄留者」と書かれています。自分がここにいるようではないと健全な意味で、感じる必要があるということです。

日本において、私たちの霊的成長を妨げる原因の一つは「他の人々に合わせる」ことです。しばしば、「同調圧力」という言葉がありますね。同じことを思わなければいけない、こう考えて当たり前だという、目に見えぬ、そして無言の圧力です。それをしばしば、「出る杭は打たれる」という言葉で言い表します。けれども私は、このように話したことがあると思います。「出すぎた杭は放っておかれる。」ということです。神を信じていく、ということは、普通ではないということです。ですから、「イエス様の証しのために、変な日本人になろう。」と勧めたことがありますね。そこで、それを聞いていた宣教師が、「教会に戻って来たら、自分だけが変な奴でないことを確認して、ほっとする。」と言っていました。(笑)キリストを主とすれば、この世が居心地悪くなるのですが、それは主に住まいを求めていることの表れです。

使徒の働きでは、使徒たちが教会に来ると「報告する」ということがありました。教会に戻れば、自分が外で受けてきたことをその場で分かち合うということをしました。家に帰ったら、一日に起こったことを話しますね。それを行っていました。足なえの男を立ち上がらせたことによって、ペテロとヨハネはサンヘドリンで尋問を受けて、脅しを受けました。そして、次のように書いてあります。「釈放されたふたりは、仲間のところへ行き、祭司長たちや長老たちが彼らに言ったことを残らず報告した。(4:23)」残らず報告しました、それは自分が心を許すことのできる場であったからです。そして彼らは心一つにして祈りました。そしてアンテオケの教会では、パウロとバルナバが小アジアでの宣教旅行を終えて、「14:27 そこに着くと、教会の人々を集め、神が彼らとともにいて行なわれたすべてのことと、異邦人に信仰の門を開いてくださったこととを報告した。」とあります。ここでは、神の恵みを分かち合うのに、すべてを報告しました。これも、教会を自分たちの居場所にしていたからです。

2A シオンへの大路 5-7

ですから、主を礼拝する教会を自分の居場所にしてほしいという点が一つ目にあります。二つ目に牧者としてみなさんに願っているのは、「天に向かって進む」ということです。神の国に入るまでは、この地上において巡礼をしているようなものです。いろいろな困難や試練があっても、主が共にいてくださることを知ることで、5節から7節までを読みます。

84:5 なんと幸いなことでしょう。その力が、あなたにあり、その心の中にシオンへの大路のある人は。84:6 彼らは涙の谷を過ぎるときも、そこを泉のわく所とします。初めの雨もまたそこを祝福でおおいます。84:7 彼らは、力から力へと進み、シオンにおいて、神の御前に現われます。

「シオンへの大路」という言葉があります。大路というのは、英語ですと「ハイウェイ」です。「高くなっている路」という意味です。少し高くしてあるところを歩いていきます。イザヤ書には、数多く、世界に散らされたユダヤ人が大路を通して、エルサレムに戻ってくる預言が書かれています。有名な箇所は、35章8-10節です。「そこに大路があり、その道は聖なる道と呼ばれる。汚れた者はそこを通れない。これは、贖われた者たちのもの。旅人も愚か者も、これに迷い込むことはない。そこには獅子もおらず、猛獣もそこに上って来ず、そこで出会うこともない。ただ、贖われた者たちがそこを歩む。主に贖われた者たちは帰って来る。彼らは喜び歌いながらシオンにはいり、その頭にはとこしえの喜びをいただく。楽しみと喜びがついて来、嘆きと悲しみとは逃げ去る。」神の国が地上に立てられて、キリストのおられるシオンに向かって大路があります。そこは、誰にも邪魔されることのない、聖なる道、贖われた者だけが通ることのできる路です。そして、シオンにはいれば、楽しみと喜びがあり、嘆きと悲しみが去ります。安息を得ることができるのです。

新約聖書では、シオンとは地上にエルサレムだけでなく、天から来るものであることを啓示しています。天からのエルサレムがシオンです。そこにまで至るのには、私たちも信仰の巡礼を行っているようなものですね。パウロはルステラで石打ちにあって死にかけたのですが、一命をとりとめま

した。そしてそこにいる弟子たちに、「私たちが神の国にはいるには、多くの苦しみを経なければならぬ。(使徒 14:22)」と言いました。そして、ヘブル書 4 章には天に入ることを安息として話し、「ですから、私たちは、この安息にはいるよう力を尽くして努め、あの不従順の例にならって落語する者が、ひとりもないようにしようではありませんか。(11 節)」と励ましています。

今、私たちは巡礼と言っても、ピンと来ないかもしれません。聖地旅行に行くには、一日のうちにイスラエルのベングリオン空港に到着できるからです。しかし、そこから確かに巡礼魂でないと、単なる観光だと思つとんでもない間違いであることは、経験者は知っていますが。日本人で初めて巡礼をした人は、ペトロ岐部というキリシタンでした。彼は、ローマに巡礼に行ったのですが、その途中、エルサレムに向かったのです。インドのゴアまでは船で渡り、そこから陸路でパキスタン、イラン、イラク、ヨルダンを徒歩横断又は船に水夫として乗り込みしエルサレムを巡礼して、三年かけてローマ市にたどり着いたそうです。壮絶ですね。

このキリシタンと同じような時代に書かれた本で、プロテスタントのジョン・バニヤンという人が書いた「天路歷程」という本があります。聖書の次に最も多く読まれた本とされています。天路歷程とは Pilgrim's Progress、「巡礼者の旅」というような意味です。まさに、シオン山に向かうために、滅亡と呼ばれる町から出ていって、いろいろな人に出会い、誘惑を受け、また励ましを受けながら前に向かって進んでいきます。「軽薄」と言う人、「怠慢」という人、「傲慢」という人も出てきます。落胆という沼におちてしまったりもします。誘惑を受けてあやうく「道德の町」に歩き出したりします。「困難な丘」という丘を上ります。獣とも戦わなければいけません。献身という道連れもあり、シオンの山に行くまでに「虚栄の町」というところを通らねばならず、献身によってこの世の栄えを通り抜けるのです。献身という道連れは殉教します。惑わしの国もあり、そこも急いで通り抜けると、目標であった永遠の国に到達するのです。

この本を読むと、すべての人が思い当たる節があります。イエスを信じれば天への約束が与えられるのだから、その後の生活は心配しなくていいではないか？と思われるかもしれませんが、しかし、聖書は「大路」という言葉を使って、そこまで行く道があるのだということを教えているのです。

「涙の谷を過ぎるときも、そこを泉のわく所とします」とあります。「涙」はバカという地名ですが、惨めさや悲しみを表しているそうです。そして乾いたところらしいです。しかし、そこに泉の湧くところと神がしてくださいます。イエス様はその泉であられますね。「わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。(ヨハネ 4:14)」そして、「初めの雨」とあります。冬の始まり、十一月から十二月に降る雨です。初めの雨があるのですから、終わりの雨もあります。それは三月に降る雨です。聖霊を表しています、初めから終わりまで聖霊が注いでくださいます。そして、「力から力へと」進みます。勝利から勝利へと進む、と言い換えてもいいでしょう。聖霊に満たされた生活は、栄光から栄光へと主の似姿に変えられる生活です。そして、シオンについて到着して神の前に出るのです。

私たちが礼拝に集う時に、天のシオンへの大路が一本、心の中に通っているでしょうか？私たちはそこに向かうのです。

3A 神の盾 8-12

そして三つ目に、みなさんをお願いしたいことは、「神を盾とする」ということです。神こそが自分を安全に守ってくださる方にする、ということです。

84:8 万軍の神、主よ。私の祈りを聞いてください。ヤコブの神よ。耳を傾けてください。セラ 84:9 神よ。われらの盾をご覧ください。あなたに油そそがれた者の顔に目を注いでください。

著者コラは、「われらの盾」を見てほしいと神に願っています。その盾とは、「油注がれた者」のことです。訳すと「メシヤ」、キリストのことです。ここではそのまま、自分たちの王ダビデのことを言っていたのでしょう。けれども、究極的に現われるダビデの子、キリストのことを油注がれた者と言っています。ダビデがイスラエルの盾となって守ってくれたように、キリストが私たちの盾となっているということです。

キリストは私たちの盾です。この方がおられるので、私たちは罪に定められません。「ローマ 8:1 こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」キリストの内にいるので、神はキリストをもって私たちを見てくださいます。だから、私たちがキリストにあって完全であるのです。こんなすごいことはありません！私たちはキリストにあって、完全であり、聖であり、義である神に受け入れられているのです。この方が、ご自分の流された血によって、罪の赦しを行ってくださったのです。

84:10 まことに、あなたの大庭にいる一日は千日にまさります。私は悪の天幕に住むよりはむしろ神の宮の門口に立ちたいのです。

キリストにある自分を知れば、いかに恵みを受け、祝福されているかを知ることができます。そこでは時を忘れます。永遠に入ります。「あなたの大庭にいる一日は千日にまさります。」と言っているのです。しばしば、天に入るという話をすると、それほど魅力的ではないと感じる人が多いです。それは、今の時が延々と続くということではないのです。そうではないのです、たった一日が地上の千日よりも優れているという、永遠性であります。キリストがおられるということは、自分の何十年の人生でも得られない命の意味を得ることができるのです。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。(2コリント 5:17)」

ですから、「悪の天幕に住むよりはむしろ神の宮の門口に立ちたい」と言っています。この賛歌の著者はコラの子らです。コラは、アロンとモーセに歯向かい、主が生きたまま陰府に降らせたあ

のケハテ族のレビ人ですが、その子たちは憐れみを受けました。そして彼らはダビデの時代に、門衛の務めに任ぜられました。宮の門口で、いつも礼拝賛美を見ていましたが、そこにいることがなんと幸せなことか、自分の居場所がはっきりしている悪の天幕にいるより、すぐれていると言っているのです。

かつて学んだ詩篇で、アサフが悪者の栄えをねたみ、うらやんでいるところがありました。自分は年老いて、病んでおり、もう死ぬ時が近づいているのではないかと言う時に、悪者の栄えが目にとまったのです。それで悩んで、むなしく手を清めているのではないかと礼拝の奉仕が、厭うところまで心がすさんでしまいました。ところが、聖所に入って悪者に対するすみやかな裁きを彼は見る事ができ元気を回復します。私たちも、神から遠く離れてしまっていると感じることがあるかもしれません。けれども、主の慈しみ、主の良さを思ってしがみついてください。

なぜなら天に御国において最も小さい者であっても、この世における栄え以上に栄えているからです。イエス様がバプテスマのヨハネのことを話した時、こう言われました。「マタイ 11:11 まことに、あなたがたに告げます。女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネよりすぐれた人は出ませんでした。しかも、天の御国の一番小さい者でも、彼より偉大です。」コリント人への手紙第一 1章には、キリストにあつて愚かな者は、この世の知者よりも賢く、キリストにあつて弱くされている者は、この世の力あるよりも強いことを教えています。キリストこそが知恵であり、力だからです。

84:11 まことに、神なる主は太陽です。盾です。主は恵みと栄光を授け、正しく歩く者たちに、良いものを拒まれません。84:12 万軍の主よ。なんと幸いなことでしょう。あなたに信頼するその人は。

「神なる主は太陽です。盾です。」とあります。神の太陽がさんさんと輝くのは、恵みがどんどん降り注がれている状態です。そしてその恵みによって、「盾」すなわち私たちを守ってくださいます。私たちは神の良き好意、恵みによって敵から守られるのです。そしてこの姿はまさに、新しいエルサレムにおいて実現します。都には、太陽も月もありません。なぜなら、神と小羊ご自身の栄光が都を照らすからです。

そして、「主は恵みと栄光を授け」と言っていますね。神の恵みによって、私たちは神の栄光を見ます。「エペソ 1:6 それは、神がその愛する方によって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。」恵みというのは、基本的に「好意」です。神が自分をよく思ってください、ということです。そして、その好意は私の何か行つたという業ではなくて、神ご自身の性質が、神ご自身がその好意の目をやめることができない、ということです。神ご自身がよく思ってくださいから、祝福されます。私たちの行ないに関わらず祝福してくださいませ。

そのことによって、私たちは何ができるかと言いますと、神をほめたたえることができます。神の栄光は、神がもつぱら私たちに良くしてくださることによって現われるのです。もし、私たちが何か

良いことを行ってそれで神がそれに報いられるのであれば、神ではなく人に功績が向かいます。けれども神が行われているのであれば、神に栄光が帰されます。だから、神は私たちに恵みによって接したいのです。どうか、この恵みによって守られてください。

神が一方的に良くして下さることについて、信頼してください。それこそが、敵からみなさんを守る道です。